

懐かしさと 新しさが交錯する。

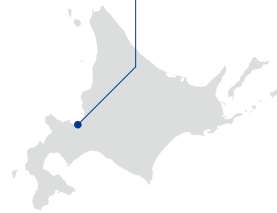


銭函駅（JR函館本線）

小樽市銭函2丁目2番5号／昭和6年に建てられた駅舎は、2段の勾配が付けられたマンサード屋根が特徴的。北国らしさと牧歌的な味わいがある。

駅まち叙景

Vol.1
— 銭函



銭函に新しい風が吹いている。移住者が増え、平日も観光客の姿が絶えない。いったい何が人を引きつけるのだろうか。

JR銭函駅に降り立つと、ホームに置かれた千両箱が目に入る。なんとも景気のいいこの地名の由来には諸説あるが、鯨魚が盛んだった頃、漁師の家に銭箱が積まれたことから名付けられたという説が有力そう。江戸時代から鯨魚で栄えてきた銭函は、幕末には交通の要所であった。明治二年、北海道開拓の父、島義勇が上陸し開拓使仮役所を設置すると、札幌本府建設の拠点として重要な役割を果たした。明治十三年には、小樽の手宮・札幌間に官営幌内鉄道が開通。銭函駅はこのとき開業した北海道初の駅の一つ。以来、銭函は小樽と札幌を結ぶ中継地として発展していった。

昭和に入ると銭函はリゾート地として注目されるようになる。美しいビーチはもちろんのこと、昭和三年には道内の草分けともいえるゴルフ場が開業。戦後間もない頃には競馬場もあった。鯨魚は昭和二十年代に衰退したが、銭函は、古くから人々が集い、自然豊かなロケーションと行楽を楽しんできたまちだった。



豊足神社

駅の南側の高台に、この地の歴史を物語る古社が鎮座する。豊足神社は、安永九（七八〇）年、松前の商人、阿部屋伝次郎によって建立されたと伝えられている。当時は尊伝稲荷神社と称されていたが、明治期に豊足神社と改称され、大正六年に現在地へ移転。地域の発展と安全を祈願する鎮守として大切に祀られてきた。

眼下には函館本線、その向こうには海と空。豊足神社は古木に囲まれたビュースポットでもある。春、桜が開花すると辺りは淡いピンク色に染まる。六月の例大祭は、浴衣姿の参拝客で賑わう。露店が並び境内は熱気であふれ、銭函のまちに夏が訪れる。

小樽市銭函2丁目9番10号 TEL 0134-62-2847

神明造の美しい社殿は昭和49年に再建された。

祭神:豊受姫大神、藤原三吉命、大国主大神

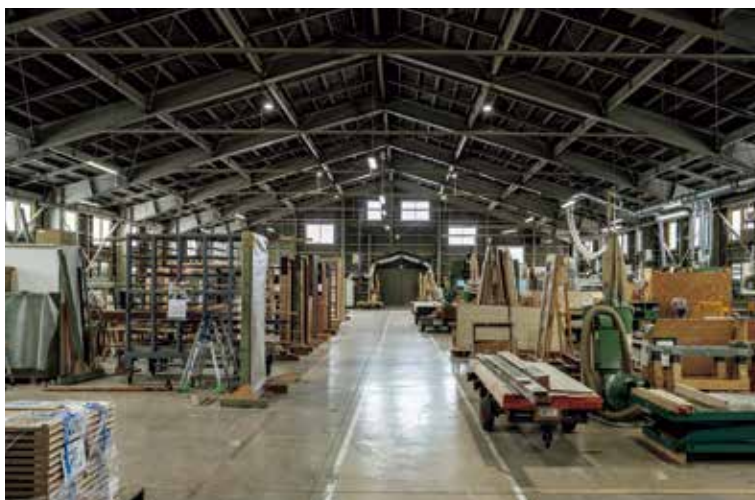


昭和初期に移築され、
今も事務所として使わ
れている建物は、もとは
樺太にあった女学校の
校舎だった。どこか懐か
しい下見板張りの外観
は往時を思わせる。

木と、人と、地域と生きる。

駅から徒歩約十分、線路沿いに広がる三万四千坪の敷地に風格ある木造の棟が建ち並ぶ。株式会社新宮商行銭函工場は、昭和十年、鉄路と水路がある地の利を生かし、北海道産木材の合板工場として開業した。「当時は工場まで鉄道の引き込み線が敷かれていました。ここでコンテナに積んだ合板木材をヨーロッパに向けて輸出していたのです」工場長の瀧川貞人さんは語る。

「木の職人」の技術は、ベテランから若い職員へと継承されている。



北海道産合板木材の海外輸出から始まった銭函工場。

受け継がれてきた技術に磨きをかけ、新しい価値を生む。銭函工場では新商品の開発にも力を注いでいる。ウイスキーを再熟成し深みのあるフレーバーを与える「北海道ミズナラボトル」は、培われてきた木工技術の粋を込めたオリジナル商品だ。ボトルの内側に繊細な焦がし加工を施すことでウイスキー樽の環境を再現。希少な北海道産のミズナラを使い職人が一つひとつ手作りしている。木の持つ力とその温もりにぜひふれてほしい。

大正八年、旧小樽区稲穂で設立された株式会社新宮商行は、「木を育て、人を育てる」という理念のもと、山林経営から木材加工による製品づくり、林業機械の販売など木に携わる事業を展開する。国内最大の製造拠点である銭函工場は今年、開業九十年。地域に根差し、長い歴史を重ねてきた。銭函工場で製造される製品は、公営住宅や住宅メーカー向けの内部造作部材や木質建具、家具など多岐にわたる。工期短縮と人手不足などから、昨今は住宅の構造材や建具のほぼ全ての加工が建築現場ではなく工場で行われているという。「技術の継承と職人の養成。課題は多くありますが、高性能機械の導入などの設備投資と人への投資、この両輪で今後このまちで人を育て、木の持つ価値を届けていきたいと考えています」。共に歩んできた地元への思いと期待は変わらない。



「北海道ミズナラボトル」¥55,000～
オンラインショップSHINGU SHOKO WOOD
SHOPで販売中。
<https://shingushoko.theshop.jp>
オーダーメイドでお名前や記念日を入れる「レーザー
刻印」サービスも好評中。加工料金¥5,000

本のある空間から生まれる「何か」。

オーブンズスキー場の麓^{ふもと}坂の途中に建つブックカフェDUAL BOOKS(デュアルブックス)。ここでは本を自由に手にとり、堪能することができる。お茶を飲みながら読んでもいいし、棚を覗きに立ち寄るだけでもいい。本好きなオーナーがつくる空間は、ゲストを選ばないし縛らない。

伊地知恭右さん^{いぢちきゆう}、亮子さん^{りょうこ}ご夫婦が、念願だった古書店をこの地でオープンしたのは令和五年五月。「ご縁があったのでしよう。お店を営む商圏があって、自然を身近に感じられる場所。そんな理想の土地を探していたときに偶然みつけたのがここでした」。最初はもつと小さな店舗で小さな商いを考えていたという。しかし、店も住まいも、眺望の開けたこの地に定めてからは、より多くのゲストをお迎えしたいと考えが変わっていった。大工さんと一緒に造りあげた店舗には、車椅子での来店も想定し傾斜が緩やかなアプローチを設けた。店の奥にはテラス席もあり、夏には雄大な石狩湾を眺めながらビールを楽しむこともできる。



文学、社会科学、自然科学、理工科学など基本的なジャンルをはじめ音楽やアート、サブカルチャー、雑誌、漫画、児童書、絵本も揃える。



メニューは珈琲(深煎り¥650〜・中煎り¥550／HOT・ICE)、ハーブティー¥600／HOT、小樽ビール(ピルスナー¥600・ノンアルコール¥450)など。



←活字から離れ、心を無にするひとときも。大きく切り取られた窓からは広やかな海と空、対岸の増毛連峰が一望できる。
→DUAL BOOKsオーナーの伊地知恭右さん(左)、亮子さん(右)ご夫婦
店名のDUALという言葉には「気づきの螺旋」が紡がれて懐かしい世界にアクセスする、そんなイメージが込められている。

銭函の魅力について、「海があつて、山がある。都市とのアクセスも良いから自然を楽しむライフスタイルを無理なく実現できます」と恭右さん。趣味やライフステージが近ければ、コミュニティも生まれる。新しい人やカルチャーを受け入れる懐の深さもこのまちの魅力なのかもしれない。

見晴らしのいい古書店には、旅人や学生、お子さんから高齢の方まで様々なゲストが来店する。伊地知さんご夫婦が次に手掛けるのは、「百年後も生き続ける本」探し。時代に消費されない本を選書していきたいと語る。DUAL BOOKsは、訪れるたびに発見がある。本のある豊かな空間に新しい風を呼び込む古書店だった。